

## A Note on Tida no Fa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23759">http://hdl.handle.net/2297/23759</a>

## 『太陽の子』覚書

——「はじめから、沖繩を守る気ななかつたんや」——

近藤 明

A Note on Tida no Fa

AKIRA KONDOH

一  
灰谷健次郎『太陽の子』に、神戸で琉球料理店を営む父を持つ主人公の少女「ふうちゃん」に対して、集団就職で沖繩から来た青年「ギツチオンチオン」が沖繩の戦争について教える、次のような場面がある<sup>(1)</sup>。

「戦争やねんから鉄砲で撃ちあうんやろ。大砲で撃たれたら大砲で撃ち返すんやろ。戦車は戦車で、飛行機は飛行機でやりあうのが戦争やろ」

ふうちゃんがなにを考えているのか、やつとギツチオンチオンはわかつたようだ。

「沖繩の戦争は、そんな戦争とちがうねん」

ギツチオンチオンは、情けなさそうにいった。

「そんならどんな戦争や」

よわつたなど、ギツチオンチオンはいった。

「こういうことは正確に教えんとな」

ギツチオンチオンはそういって、本箱から一冊の本を持ってきた。

「ほら、ここにかいてあるやろ。陸戦史研究普及会編の『沖繩作戦』によれば、四月三日には二〇万六七五〇人、五月三十一日には二三万八六六九人にふえた。この巨大な米軍は一五〇〇隻余の艦船に分乗して沖繩を襲ったのである、な、ふうちゃん。この一五〇〇隻の船の中には飛行機を積んでいる船も、戦車を積んでいる船も、大砲を積んでいる船もふくまれているんやで」

「日本は？」と、ふうちゃんはたずねた。

「それがやな」

と、ギツチオンチオンはいつて、また本のページをめくつた。

読むぞと、ギツチオンチオンはいった。

「陸軍兵力約八万六四〇〇人、海軍兵力約一万人、ほかに火力としては火砲が二五門、噴進砲が二〇門、迫撃砲が五〇門、各種の機関銃がおよそ三〇〇ほどあつた……こんなもん戦

争になるかい。沖縄の人間は勇敢にたたかったけど、こらど  
うもならんワ」

それにやぞ——と、ギツチョンチョンは顔を真っ赤にして  
いった。

「沖縄決戦をひかえているのに、沖縄守備の日本軍はその三  
分の一の兵力をほかに移してしもたんや」

いつかギツチョンチョンは恐い顔だった。

「はじめから、沖縄を守る気なんかなかったんや。沖縄は見  
殺しにされたんや。ヤマトーの奴は、いつだって沖縄を見殺  
しにして自分だけ甘い汁を吸いよる。むかしからずつとそう  
や。今だつてそうや。これからもそうや」

この場面を読んでいる中で、「陸軍兵力約八万六四〇〇人、海軍  
兵力約一万人、ほかに火力としては火砲が二五門、噴進砲が二〇  
門、迫撃砲が五〇門、各種の機関銃がおよそ三〇〇ほどあった」  
という数字が、ふと気にかかった。火砲、噴進砲（今日いうロケツ  
ト砲に相当するものらしい）、迫撃砲の合計で百に達しておらず、  
機関銃およそ三〇〇という数字も、十万人近い兵士数からすると  
三〇〇人に一挺ほどということになる。筆者は戦後の一九五八年  
生れで戦争体験・軍隊経験は無いし、格段の軍事知識も持ち合わ  
せていないが、この数字が兵士の人数に対して、また米軍の兵力  
に対して、極めて貧弱なものであることは想像がつく。「大隊砲な  
んで、馬一頭がころころとひいてゆくかわいものだが、大砲に  
はかわりがない」（尾川正二『東部ニューギニア戦線』光人社NF  
文庫 二〇〇二年）という程度のもも含めて、「火砲が二五門」  
なのか。

この数字の通りであるとすれば、当時の日本軍（の沖縄の防衛  
計画や沖縄への配置・装備に責任を持つ部局）は、兵士の数こそ

それなりに揃えはしたものの、それに持たせる兵器の整備・輸送  
には極めて不熱心だったというべきで、ギツチョンチョンの「は  
じめから、沖縄を守る気なんかなかったんや」という言葉にうな  
ずくしかない。しかし、沖縄本島の戦闘に関していえば、米軍の  
沖縄本島上陸が四月一日、日本軍の組織的抵抗が終了したのが六  
月下旬であり、右のような貧弱な装備の日本軍が、いくら地  
形等を利用したとしても、これほど長く抵抗できるものだろうか  
とも思われる。

この小文は、右の「火力としては火砲が二五門」という記述  
の根拠を確認しようとする中で知られたことを報告するものであ  
る。

## 二

先の『太陽の子』からの引用の中で具体的な書名の示されてい  
る陸戦史普及会編『沖縄作戦』という本は実在し、一九六八年に  
原書房から初版が刊行されている<sup>(3)</sup>。そこでこの『沖縄作戦』  
を見ると、同書の「付表第五 彼我の損害」（p.一七三）に

米第一〇軍の兵力	四月三〇日現在	二〇六、七五〇
	五月三一日現在	二三八、六六九
	六月三〇日現在	一七六、四九一

という数字が示されており<sup>(4)</sup>、四月三〇日と五月三十一日の数字  
は確かに同書によっていると見られそうだが、ギツチョンチョン  
が読み上げているような形での本文は同書には見当たらない。  
従って、ギツチョンチョンが持ってきた「一冊の本」は『沖縄作  
戦』の数字を引用した別の本、ということになるが、それが何ら

かの実在する本であるのか否か、また実在する本であるとしたらその書名は何であるのかを確認することはできなかった。

この後ギッチョンチョンが続けて読んだ「陸軍兵力約八万六四〇〇人、海軍兵力約一万人。ほかに火力としては火砲が二五門、噴進砲が二〇門、迫撃砲が五〇門、各種の機関銃がおよそ三〇〇ほどあった」という記述も、このような形で本文は『沖繩作戦』には見当たらない。そこで『沖繩作戦』の「主要参考文献資料」に掲げられている文献の一つである防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 沖繩方面陸軍作戦』（朝雲新聞社 一九六八年 以下『沖繩方面陸軍作戦』）を見ると、次のような記述がある<sup>(5)</sup>。

二十年三月下旬の沖繩本島の戦力概要は次のとおりである。

陸軍兵力 約八六、四〇〇名

陸軍弾薬 歩兵弾薬 ○・六会戦分

砲兵弾薬 ○・八会戦分

陸軍糧秣 三月十日現在約九カ月分

(中略)

海軍兵力 約一万人

砲台(各種火砲約二五門)、噴進砲約二〇門、迫撃砲約五

〇門、各種機関銃約三〇〇、比較的装備は良好であるが機動力が乏しい<sup>(6)</sup>。

「陸軍兵力」「海軍兵力」の兵士の人数は、海軍については『沖繩作戦』に示された数字(p三九、p七九)と合致し、また陸軍・海軍とも「太陽の子」に示された数字と合致する。さらに「海軍兵力」として兵士の人数に続いて掲げられている火砲、噴進砲、迫撃砲、各種機関銃の数は、『太陽の子』でギッチョンチョンが読み上げた「一冊の本」のそれと合致する。従って「一冊の本」の

「火砲が二五門」という日本軍の火力に関する数字は、直接的にか間接的にか、これに依拠するものと見られよう。またその「火砲が二五門」という数字は、海軍部隊のそれを示すものらしいと見がつく。

ところで、先に引用したような『太陽の子』の記述からは、読者は、この数字を海軍部隊のみの数字ではなく陸軍部隊・海軍部隊を合計した日本軍の火力の総数と受け取ってしまうのが普通であろう。仮に約八六、四〇〇名の陸軍部隊が火砲も機関銃も全く持っていないなかった(それ以外で日本軍の持っているような武器というと、小銃、手榴弾、擲弾筒、地雷や各種肉薄攻撃資材といったところだろうか)のならそれで良いわけであるが、実際そうだったのか。

先の『沖繩作戦』p三七以下の「わが部隊の状況」によると、「配備の重点は沖繩本島で、三箇師団と一箇旅団を基幹とする部隊が充たされた」とある。さらにこれ以外に沖繩本島に配置された陸軍の主要部隊として

戦車第二七連隊 軍砲兵隊 重火器部隊 特殊部隊

が挙げられ、この中の軍砲兵隊については野戦重砲兵第一連隊、同第二三連隊、独立重砲兵第一〇〇大隊、重砲兵第七連隊、中迫撃砲二個大隊、臼砲一個連隊、軽迫撃砲八個中隊からなり、「これに各師団等の砲兵を加えると、七五ミリ以上の火砲総数は約四〇〇門となり、太平洋戦場において、まだかつてない大砲兵力を集めてきた状態であった」(p三九)と述べられている。ただしこれは前述の三箇師団と一箇旅団のうちの第九師団が台湾に、また中迫撃砲二個大隊がフィリピンに転用される前の数字のようで、転出後はその分減少したわけであるが<sup>(7)</sup>、『沖繩作戦』の「付表第

3 在沖繩主要陸軍部隊編成の概要」や『沖繩方面陸軍作戦』の「付録 主要陸軍部隊編成概要」によると<sup>(8)</sup>、なお陸軍だけでも数百門単位の火砲が残り、機関銃も相当数のものがあつたことになる。以上から、沖繩本島における陸軍部隊・海軍部隊を合わせた火力の総数は、「火砲が二五門」という数字よりもかなり多いものだったと見るのが妥当であろう<sup>(9)</sup>。

灰谷健次郎がこの記述で依拠したのが『沖繩方面陸軍作戦』であるとすれば、陸軍の火力を計算にいれないという誤読か読み飛ばしをしていたことになるし、他の文献（ギッチン・チョン・チョンの読み上げた「一冊の本」が実在の本であるのならばそれ）に拠つたのだとすれば、その本がそのようなミスを含んだものだったことになる。

なお『沖繩方面陸軍作戦』の該当箇所は、先に引用したように、海軍兵力として兵士数の他に火砲・機関銃などの数を掲げているのに対して、陸軍兵力としては兵士の数を掲げるのみである。ここから、この記述自体に、誤読・読み飛ばしを誘う面があるとの見解もあるかもしれない。しかし、同書を該当箇所のみ読んだとしても、「陸軍弾薬 歩兵弾薬 ○・六会戦分 砲兵弾薬 ○・八会戦分」というくだけりがあるのだから、陸軍に歩兵だけでなく砲兵が居て、そのための火砲や弾薬——○・八会戦分という量は、多いとはいえないのだろうが——も用意されていたことは察せられそうなのである。更に同書の全体を読めば、先に触れた「主要陸軍部隊編成概要」は無論、随所の記述から陸軍部隊がまとまつた数の火砲や機関銃を持つていたことは容易に読み取られる。

前述のように、誤読なり読み飛ばしなりを灰谷健次郎がしたのではなく、彼の利用した文献が既にそのようなミスを含んでいたものであつたのかも知れない。そうだとすると、『太陽の子』の中

に具体的な書名が挙げられている『沖繩作戦』に実際目を通しただけでも、前述のように日本軍の火力についての情報は得られる筈であるが。

### 三

前節で述べたように、「火砲が二五門」という数字は海軍部隊だけのもので、陸軍部隊・海軍部隊を合わせた沖繩本島における日本軍の火力の総数は、それよりもかなり多いものだったというのが事実に近いようである。

むろん、火砲や機関銃の数があつた程度揃つていたとしても、制空権・制海権を失い補給・増援の絶たれた状況下、豊富な補給と空・海からの圧倒的な支援を持つ米軍に対しては、蟻螂の斧の感を免れず、その点で「こんなもん戦争になるかい」という評価も大きくはゆるがないという見方もあるだろう。だとしても、「はじめから、沖繩を守る気なんかなかったんや。沖繩は見殺しにされたんや。ヤマトーの奴は、いつだって沖繩を見殺しにして自分だけ甘い汁を吸いよる」という発言に対する評価なり感想なりは、「火砲が二五門」という数字を前提とした場合とは違つてくるという向きもあるだろう<sup>(10)</sup>。

歴史書ではなく児童文学作品である『太陽の子』について、このようなことを問題にするのは、心ない揚げ足取りであるとの批判があるかも知れない。もとより筆者は、この点からただちに児童文学作品としての『太陽の子』の価値について性急な判断をしようとするものではないし、旧日本軍や太平洋戦争を美化しようなどと考えているわけでもない。

ただ、本作品が歴史・歴史認識に関するメッセージ性を持ったものとして読まれることも少なくないようであるし、そのような

メッセージ性を期待して年少者に薦められたりすることもある。また作品中のこととはいえ、「こういうことは正確に教えんと」というギッチョンチョンの発言に続いて、『沖繩作戦』という実在する書名とそこに記載されている米軍の兵力の数字が示されている、それに続いて日本軍の兵力、火力の数字が示される形になっていることで、何らかの信頼性の高い出典に基づく数値であり、史実であると理解する方向に読者が導かれるであろうことも否めない。そういう文脈で示されるこの数字の、事実（により近いと思われるもの）との隔たりについて筆者としても当惑しているのである。

同じ『太陽の子』の、梶山先生が広島原爆被害を教える場面について、黒古一夫『灰谷健次郎——その『文学』と『優しさ』の陥穽』（河出書房新社 二〇〇四年）は

歴史意識を培うための必須条件はいかに「事実」をきちんと押さえるかである。情緒によって「正しい」歴史意識は育たないし、「事実」を軽視すると保守派（例えば、現在大手を振っている「自由主義史観」者たち）から「偏向教育」などと批判されるのがオチである。この部分で何が「事実」に反しているか。それは、広島原爆被害について教えるのはいいとして、「この人たちは、やがて、みな死んでしまったんだよ。広島原爆被害者は三十万六千人だったというからね」という梶山先生の言葉である。確かに、広島で被災した人たちは「三十万六千人」ぐらいである。しかし、この人たちが「みな死んでしまった」わけではない。（p.60）

と述べているが（11）、「事実」に対する姿勢については、この小文で問題とした箇所についても、同様のことが言えるのではないか。

自らの疑問点を整理しようとして、本来の専門分野とは大きく異なる性質の文章を書くことになってしまった。細部での知識不足や誤解等少なくないと思われる。ご教示をお願いしたい。

（注）

- （1） 初版は一九七八年 理論社。引用は一九七九年の第十一刷による（p.94〜95）。角川文庫版（第十六版）では「それがやな」が「それがな」になっているほか、ルビに若干の異同がある。
- （2） 島の大きさ等諸条件に差があるが、サイパン島では上陸が六月十五日、守備隊の「玉砕」が七月上旬で、その間三週間強である。
- （3） 筆者が使用したのは、一九七四年刊の第四版（専修大学の児島襄文庫所蔵のもの）を、図書館の相互貸借によって利用）である。
- （4） この数字は、『戦史叢書 沖繩方面陸軍作戦』のp.612にも「米軍戦史『最後の戦い』(US Army OKINAWA The Last Battle 1960)の付表第一〜第三によるものとして、示されている。
- （5） 同書巻末の注によると、この記述の根拠は大本営陸軍部第一課（作戦）で各方面の戦況を整理していた記録である「戦況手簿」である。なお引用箇所のうち（中略）の部分は、（注）として弾薬一會戦分の一銃（門）当たりの基準が、兵器の種類ごとに示されている（昭和十八年十月十日参謀本部の幕僚手簿による由）。
- （6） 同書の五六九ページに表として海軍部隊の配備地区と装備兵器の詳細が記されている。それによると小録地区に配備された砲台が、二十センチ砲五門、十五・五センチ砲三門、十五センチ砲六門、十二センチ砲十一門で、合計二五門である。また迫撃砲は五〇門、噴進砲は合計十九門である。また小録地区と国頭地区の海軍部隊が装備していた機銃は、二十五ミリ六四挺、二十ミリ二五挺、十三ミリ七五挺、七・七ミリ一二四挺で、合計二八八挺である。同書巻末の注によると、この記述の根拠は「捷二号作戦に関する第二復員局資

料」である。

(7) ギッチョンチョンチョンの言う「沖繩決戦をひかえているのに、沖繩守備の日本軍はその三分の一の兵力をほかに移してしまつたんや」とはこれらの部隊の転用を指しているのだらう。転出した第九師団は現役師団で伝統・経験を持つものの「同師団の砲兵は山砲三個大隊編成で、比較的弱体であった」(『沖繩作戦』p.三七)とのことで、実戦経験は無いが「特にその砲兵力は優秀であった」(同p.三七)とされている第二師団は沖繩に残されている。『沖繩方面陸軍作戦』には「第三十二軍としては強力な砲兵を有する第二十四師団を残置したい気持ちが強かつたことによる」(p.一三四)との記述があり、同書巻末の注によると、この記述の根拠は第三十二軍高級参謀八原博通大佐の戦後の回想である。

(8) これらに示されている数字によれば火砲・機関銃の一応の合計数を出すこともできるが、「第一大隊は資料明らかなでないが第一大隊とほぼ同じと推定される」(『沖繩方面陸軍作戦』p.六五〇) 野戦重砲兵第一聯隊編成概要、「兵器裝備の内容は明らかでないが、昭和十六年度動員計画例によれば次のとおりである」(同p.六五一) 重砲兵第七聯隊編成概要といった記述が見られ、資料不足や関係者の多くが死亡しているところから推定等によらざるを得ない場合が少なくないようなので、正確な合計数を出すことは困難と判断して、「数百門単位」という言い方にとどめた。

(9) 『沖繩作戦』『沖繩方面陸軍作戦』とも防衛庁・自衛隊寄りの文献であり、そのような文献の記述は信じられないという主張もあるかも知れない。しかし、それをもって『太陽の子』の記述を弁護するとしたら、前述のように『太陽の子』にも『沖繩作戦』の書名とそれに基づく数字が挙げられているのであるし、直接的にか間接的に『沖繩方面陸軍作戦』に依拠するかと思われる数字も挙げられているのだから、一貫性を欠くことにならう。

また、新出の史料や証言などによる沖繩戦研究の進歩によって、これらの文献の記述にも当然改められるべき部分はあるだらう。それらの点については御教示をお願いしたい。

(10) 日本軍が、ギッチョンチョンの主張から印象づけられるよりは真剣に「沖繩を守る気」が感じられるような戦備をしていたのだとしても、その場合の「沖繩を守る」というのは、沖繩の住民を守ることはなく、沖繩を捨て石として「本土決戦」の時間稼ぎをすることではないか、という批判はあるだらう。それを否定するつもりはないし、まして沖繩戦で生じたとされる種々の問題について日本軍が免責されると主張しているわけでもない。ただ、『太陽の子』の該当箇所では、日本軍の火力の貧弱さと、一部有力部隊の転出とを直接の理由として、「沖繩を守る気」がなかったと主張しているように読める。その前者の根拠として挙げられている「火砲が二五門」という数字の妥当性を、この小文では問題としているのである。

(11) 厳密に言えば、梶山先生が「みんな死んでしまったんだよ」と言っている「この人たち」とは、直接にはグラビタ雑誌の写真に写っている負傷者であり、「三十万六千人」の被害者が「みな死んでしまったんだよ」と言っているのではないとも取れる。しかし、一読すればそのような意味に取られやすい記述である。この小文で問題としてきた箇所も非常に慎重に読めば、「火力としては火砲が二五門」の前後に飛躍や省略があるのかも知れず、これが陸海軍すべてを合わせた日本軍の総力だと断定しているわけではないのかも知れない。しかし、特に予備知識や先入観のない読者はそのように受け取るのが普通であらう。

〔付記〕 第一節に引用した『東部ニューギニア戦記』の著者で、筆者の前任校である梅花短期大学(現梅花女子大学短期大学部)で、二年間勤務をともにした尾川正二先生が、二〇〇九年三月五日に亡くなられた。ご冥福をお祈りする。